

## 2012年度（平成24年度）

### 受託事業

#### 『奥熊野・北山村の民俗誌 100の話で語る村の今昔』の刊行

北山村からの受託事業。『民俗誌』は「祈」から「歌」までの14章で構成、現地調査に1980年代から2000年までの約20年間に行なった聞き取り調査をふまえて執筆した。執筆者はセンター事務局長鈴木裕範、和歌山大学大学院生、地元在住エッセイストら4人、挿絵は田辺市在住の女流画家廣本直子さん、装丁はグラフィックデザイナー太田博久氏が担当。『民俗誌』は298ページ、2千部印刷。

### 協力事業

#### 「北山村の婚礼と祝膳料理」

NPO 北山じゃばら村が、昭和の村の結婚式でふるまわれた「祝い料理」を再現し、平成25年1月に披露した。きのくに活性化センターでは、村の新たな観光資源の発掘をめざすNPOの事業に協力し、和歌山大学経済学部の女子学生5人が村内に住む約20人の女性（主に大正、昭和ひとケタ生まれ）に結婚式の様子や料理の聞き取り調査を行ない報告書にまとめた。これにもとづき、地域づくりの料理人大和田遥さんが料理を再現。

### 独自事業

#### 「廃校舎の利活用と地域再生」研究会準備会設立

過疎化と少子高齢化、市町村合併等によって増えつつしている廃校舎を、地域づくりの拠点のひとつとして再生することを目的に、きのくに活性化センターでは研究会の設置をめざしている。その準備会（座長 生涯学習センター講師西川一弘氏）を発足。研究会は、きのくに活性化センター企画運営委員会委員を中心に廃校舎の再生に取り組み人材や関心を寄せる住民で構成する。平成25年度に現地調査を実施し、事例を集めて廃校舎活用のブックレット作成をめざす。

#### 「南海・東南海地震と紀南一串本町住民意識調査」

南海・東南海から南海トラフ地震まで巨大災害が近い将来、高い確率での発生が予測されるなかで、串本町における住民意識調査を実施し、報告書にまとめた。2004年から鈴木ゼミが行なってきた3回目の調査で、きのくに活性化センターで報告書作成を支援した（100部）。

#### 大学と商店街の連携・交流による新宮市仲之町商店街活性化モデルの研究

地方都市の中心市街地の空洞化が進むなか、新宮市も例にもれず商店街のシャッター化が進行している。熊野地域屈指の商店街だった仲之町商店街もいま、買い物客の減少・高齢化、さらに商店主の高齢化と後継者難など多重の悩みに直面し、往時の面影は失われている。

そこで、仲之町商店街のもつ経済的な面だけではなく、文化的、コミュニティの観点から歴史ある商店街を捉えなおし、活性化の可能性を地域に提案することとし、商店主に対するインタビューを実施した。また、それをふまえてから教室で、仲之町の魅力と課題を話し合った。このフィールドワークには、経済学部生約10人が参加。